

# 図書館情報学橘会会報 第4号(通号10号)

2007年3月発行 発行者 社団法人茗溪会支部図書館情報学橘会

## 卒業式を迎えられた皆さんへ

図書館情報学橘会 会長 高鷲 忠美

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。また、卒業生のご家族の皆さん方のお喜びもひとしおだと思います。誠におめでとうございます。

そして、大学におかれまして、ご指導をされてこられました筑波大学図書館情報専門学群、図書館情報メディア研究科の先生方をはじめ、教職員の皆様方にも御礼を申し上げます。

本日は、筑波大学同窓会茗溪会支部図書館情報学橘会を代表いたしまして、会長である私が、このような立派な卒業式にお呼びいただけましたことを大変感謝いたしております。

本日、私が、学長先生をはじめとする大学の諸先生方ならびに来賓の方々を前に、このような高いところからご挨拶をさせて頂けるのも、私が筑波大学図書館情報専門学群の前身である文部省図書館職員養成所を卒業し、図書館短期大学図書館学科で助手をつとめ、現在筑波大学同窓会茗溪会支部図書館情報学橘会の会長という職に就かせて頂いているおかげです。

図書館情報学橘会は、図書館情報学群の前身機関であります文部省図書館職員養成所から図書館短期大学、そして図書館情報大学の卒業生が一つの組織となって活動しています。全ての学校の卒業生、修了生を合計しますと7,000名を超える組織であり、図書館界、情報関係企業を始め様々な分野で活躍されています。

図書館情報大学は、2002年10月に筑波大

学と統合して、筑波大学図書館情報専門学群となりました。総合大学の一学部として、今後のますますのご発展を同窓生一同お祈りし、期待しております。さて、図書館情報専門学群は、平成19年度から「情報学群」に改組されることになりました。「情報学群」の中で、図書館情報専門学群の教育内容は、「知識情報・図書館学類」と「情報メディア創成学類」の一部に引き継がれます。

大正十年開設の文部省図書館員教習所から八十年あまりの年月、日本の図書館員教育、図書館情報学の研究・教育を担ってき、それが今後も継承されていくのです。同窓会と致しましても、筑波大学同窓会茗溪会との関係など、運営については十分な議論と検討を続けて参り、正式に茗溪会支部として認められました。学群単位として支部が正式に認められました。今後とも、是非とも皆さんの若い力もお借りしながら、図書館情報学の発展のために協力できる体制にしていきたいと考えていますので、このような高い席からではありませんが、卒業生の皆さんには、同窓会へのご協力を是非ともお願いする次第です。

卒業生の皆さんに贈る言葉として、私の好きなラグビーの言葉「One for all, all for one」をご紹介します。ご存じの方が多いでしょうが、一人一人が全力を出し、力を合わせないと試合には勝てないということを示しています。ただ一人の人間として力を備えているだけでなく、チームとしての自分がなくはない。チームを組むだけでなく、チームを組むそれぞれが力を備えていな

ければチームそのものも成り立たない、ことを示しています。これから皆さん、社会に出られましたら、この言葉を実感なさるのではないのでしょうか。

この大学の生活の中で、皆さんはそれぞれの年月の中で様々な知識などを獲得なさった事と思います。これから先、社会に出てからそれを実践して下さい。もちろん、挫折もあるでしょうし、行き詰まる事もあるでしょう

うが、それに負けずに研鑽を続け、またさらに大きな人になって頂きたいと思います。

卒業生、修了生に方々のこれからのご健康とご活躍、ご家族の方々のご健康を祈念するとともに、筑波大学図書館情報専門学群、来年度からの「情報学群」、図書館情報メディア研究科のますますの発展を祈願してご祝辞に代えさせていただきます。本当におめでとうございました。

遠藤龍二先生を偲んで

## 哲学すること

1998年卒業生

佐藤文博(映画文筆家)

遠藤龍二先生がお亡くなりになったと聞いたのは、平成17年12月13日だったと思う。以前より、先生とはご懇意にさせていただき、僕の不本意な転職ラッシュにも閉口せず、先生は「次もがんばってください」と、あの独特な字体で、ご丁寧にお手紙をくださった。

いまここで、あらためて先生からいただいたお手紙を拝読している。最後のお手紙となった4月29日消印のなかで、「一日一日を大切に生きております」という件りがある。僕は、お亡くなりになるちょうど1年前に、先生ご自身からその病名を告げられ、狼狽していたので、この一文にはかなり意味深で、ますます不安になってしまった。

先生との出会いは、平成6年、ちょうど先生が図書館情報大学にご奉職されたときと僕が入学したときと重なる。知識情報概論であった。この講義は2名の先生が交代で講義されるものであったが、遠藤先生の講義は、哲学史に近い講義内容で、最初はポカンとしてしまった覚えがある。しかし、講義を拝聴していると、それにどんどん引き込まれる魅力を持っていた。僕は毎回、最前列の、先生の目の前で講義を受けた。そして生意気にも「卒業研究は遠藤先生！」と、その段階で決めてしまった。

それ以降の講義もかなり魅力的であった。記号論では、その後の僕の人生を変えてしまったし(先生ご自身の持論に心酔してしまった)、何より研究室を訪問し、そこで得られる解釈学や西洋美学のお話にも触発されたものだ。また僕の得意分野であった日本映画史にも造詣が深く、「溝口健二の『残菊物語』は傑作ですよ。あの作品を観ない日本人は、人生損をしています」と、意気投合したことも忘れられない。

先生は僕の興味関心をご理解してくださり、なんらかの美術展があると、必ず「一緒に行きませんか？」とお誘いくださった。僕は予定があっても先生との時間を大切に。渋谷のBunkamura ザ・ミュージアムの展覧会にも行き、学生の身分では高価な展覧会カタログなどを、さりげなくプレゼントしてくださった。その後、東急本店の高級日本料理店でとった昼食の味も、忘れられない思い出である。

じつは、先生のお亡くなりになる直前、僕は先生にお手紙をお送りしていた。あとから聞いたお話では、奥様が病床で代読されたという。内容は「いまはフリーターのようなことをやっているが、それでは食べていけないのでまた新しいことに挑戦している」という、これまた転職の話題である。その後僕はある公立図書館の責任者の任を受け、その後半年この任務を行っていたことをご報告したかった。

でも、先生は、きっと見ていてくださると信じている。「先生、いま僕はまた新しいフィールドで働いています。ご安心ください。」

## 2005年卒業 青山 七恵さん 芥川賞受賞に輝く

1月17日の朝、全国の新聞・テレビが一齐に「第136回芥川賞は 青山七恵さん 筑波大学(旧図書館情報大学)卒」と報じた。図情大の同窓会たる橘会としても、直ちに青山さんと接触するべく筑波大学図書館情報学群を通じてアプローチを試みた。しかし、受賞発表後、青山さんは相当に忙しいらしく、コンタクトができない状況だ。そこで、本誌では、直接のインタビューに代えて新聞各紙の記事等からルポルタージュ風に青山さんの受賞の喜びとその後の状況を追ってみた。

### 青山さんは 図情大入学・筑波大卒業

芥川賞の主催者である日本文学振興会の発表によると、青山さんは1983年1月埼玉県熊谷市生まれ、埼玉県立熊谷女子高校を卒業したとのこと。熊谷女子高校ホームページでは、青山さんの受賞に地元も喜んでいいる様子がよく現れている。同ホームページによると、青山さんは、高校在学時代は「周りに気遣い、一歩引いているような生徒」だったが、温かな中にも芯の強い生徒で担任の教諭の進路指導に際し「中学の頃から図書館が好きで司書になるのが夢」と言って図書館情報大学を受験したそうだ。

図書館情報大学では、図書館情報学科情報社会分野に所属し、武者小路澄子先生の研究室に属していたとのこと。この研究室では「コミュニケーションが成立する際には、相互理解や共感を図り、相手との共生を築いていくことが重要」ということを研究している。小説家に不可欠な視点だ。

図書館情報大学は、青山さん在学中の2004年に筑波大学と合併し、在学学生は自動的に筑波大学図書館情報専門学群の学生となり、青山さんは、2005年に筑波大学を卒業したというわけだ。

読売新聞(1月17日)によれば、「より広い世界を見たくて、就職は一般企業を選んだ」とのこと、現在は、新宿区にある旅行会社で働いている。

### 受賞作「ひとり日和」は2作目

青山さんは、子供の頃から漫然と作家になりたかったそうだが、在学中から書き始め(「窓の灯」第42回文芸賞受賞)、受賞作は2作目とのこと。芥川賞候補になって一発で受賞したことになる。

受賞の年齢23歳11ヶ月は、女性作家で3番目、男性を入れても7人目という若さと、ノミネートさ

れて即受賞ということもあって、青山さんの受賞は、各界より驚きと歓迎を持って迎えられた。

発表も石原慎太郎・村上龍両氏が揃って記者会見。村上氏は「会話が過不足なく表現され小道具も良くそろっている。」と評している(毎日新聞1月17日)。

既に、インターネット百科事典ウィキペディアに「青山七恵」の項目ページが作られ、ブログは1600件を越えている。その一人は「面白かったのは、人間関係の描写。高齢者と同居することになって、21歳のフリーターの女性主人公は、老人との同居にある種のとまどいを感じながら、そんなことどうでもいいという感覚も強く、相手をまるで無視しながら、結局、老婦人との濃厚な人間関係を築くことになる。人間関係というものの深層を良く描いている」と評している。

### 授賞式後

芥川賞の贈呈式は、2月23日に丸の内の東京會館でおこなわれた。橘会からも白い華麗な胡蝶蘭をお贈りしたが、無事に青山さんの手に届いたのだろうか。正賞の時計と副賞100万円を受け取り、破顔一笑の笑顔が美しい。贈呈式後、産経新聞に特別寄稿を寄せている。その中で、「主人公と同居するおばあさんの名前は、日本で初めての女医になった荻野吟子さんの名前をそのまま拝借した。吟子さんは私と同じ埼玉の小さな町に生まれ、地道に勉強を続け、それからたくさんの女の人を救った。同郷の先輩である彼女のように、逆境にもめげず、自分の信じた道を着実に歩いていける人になればいいな、という小さな希望を込めての命名だ。」と明かしている。

青山さんの将来は、きっと、本当にその言葉通りに生きていけると確信させる素敵な言葉だ。青山さんの未来に乾杯! (森 茜記)

## 住所不明の方 連絡をお待ちしています

橘会会員の皆様に橘会会報や茗溪会会報をお送りしていますが、下記の方々宛の封書が住所不明で戻ってきました。同窓会会報を確実にお届けするために是非新しい住所をお知らせください。ご連絡はご本人からのほか、お友達からの情報も歓迎します。連絡先は橘会ホームページの会員変更届様式または橘会の E-mail アドレスまで。

<http://www.tachibana-kai.com/announce/modify.html>

mail: [info@tachibana-kai.com](mailto:info@tachibana-kai.com)

(以下、略)

### 社団法人茗溪会支部図書館情報学橘会

〒305-8550 つくば市春日 1 - 2

E-mail [info@tachibana-kai.com](mailto:info@tachibana-kai.com)

公式ホームページ <http://www.tachibana-kai.com/index.html>

(メールアドレス、ホームページアドレスが変わりました)

発行: 2007年3月20日